

## 司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

著者	菅野 陽
雑誌名	美術研究
号	265
ページ	1-22
発行年	1970-05-15
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1440/00006581/">http://id.nii.ac.jp/1440/00006581/</a>



# 司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

菅 野 陽

はじめに

十五世紀半ば頃ヨーロッパに始まった銅版画を日本が知ったのは一五四九年キリスト教の伝来以後である。当時の銅版画は美術の一分野というよりむしろ信仰の対象物として受けとられていたと考えられる。イエズス会の布教業績の進展に伴う日本教会の宗教画に対する需要は増す一方であり、遂には日本に画学舎を設立せしむることになる。その時期は(一)一五九〇年七月から間もない頃と見られている。(二)

その頃ヨーロッパの銅版画は銅版に直接彫刻刀で彫り込む彫刻銅版画と共に、十六世紀の始め頃から薬液による腐蝕銅版画が始まっていた。しかし日本に齎らされた宗教銅版画はすべて彫刻銅版画であった。その彫刻銅版画の教育の細部は判らないが、画学舎のために来朝した宣教師が指導し、ヨーロッパ伝来の宗教銅版画の模刻をさせた。日本人の学生たちは合宿して(同宿として)訓練を受けた。(三)しかしそのような制度は一六一四年以降の徹底した禁教政策によってあらゆるキリスト教関係の美術作品は破壊散佚せしめられ、彫刻銅版画の技法は全く絶滅し、明治

八年キヨソネらの来朝までの二百六十年間甦ることがなかった。(五)それに反して、十八世紀の終り近くに始まった銅版画は、その制作の動機、技法、その習得の方法、作品に対する考え方等すべての点で全く異なっていたといえる。すなわち鎖国以後次第に流入されるオランダの文物への関心、ひいてはそれらに対する研究に伴って始められたものであった。殊に画図や書籍の挿画に見られる精妙な具体性、写実性に大いに刺戟された。従って蘭学の初期の勃興にはそれら蘭書の挿画が大きな影響力を持っていたと考えられる。

そして蘭書の挿画が銅版であることを最も早い時期に指摘した一人は野呂元丈である。(六)しかしそれらの銅版画が腐蝕法によるものであり、またその製法を何に拠って学ぶべきかを知り得た人が誰であるかは判らない。おそらくは当時の蘭学研究の先覚者たちの誰かが江戸参府の商館長の一行との対談から得たものとも考えられる。

とに角天明期に入って創製された日本の腐蝕銅版画はオランダ人の直接の指導を受けず、オランダ語の文献の訳読によるのみでその製法のために工夫を凝らし、さまざまな制約をのり越えて創り出した意義は偉大

であり、その事実は当時の外来文化の受容態度の特徴を示すものである。

この稿では創製当時の状況を考察し、創始のための技法の準拠となったオランダ原典について検討してみたい。

## 一、腐蝕銅版画の創製

### 創製者の主張

日本の腐蝕銅版画の最初の創作者は司馬江漢<sup>(七)</sup>であり、彼の第一作の完成は

天明三年（一七八三）九月とされている。その第一作と見做される『三圍之景図』では画面

の外、上部に左から右へ横書きに裏返し<sup>(八)</sup>の逆文字で「三圍之景」、右側の下の方に「芝門司馬江漢製作」、左側に「天明癸卯九月」と双方とも正常のむきで縦書きに記銘してある（図版I参照）。それから十一年後の寛政六年の『画室図』<sup>(九)</sup>には「日本創製司馬江漢」の大きな文字のほか、その右側に「天明癸卯九月初為此工」、左側に製作の年記「寛政甲寅八月」の文字が入れている。その他の彼の銅版画には「日本創製司馬江漢（画）」

「日本銅板（一盤）創製（東都芝門）司馬江漢（峻）写（一画）并刻」あるいは「司馬江漢創製」などと時代を経ても繰り返して書き入れて、絶えず創製を大いに謳った。<sup>(一〇)</sup>（「一」は直前にある字と括弧内の文字とを入れ代えたものがある意）<sup>(一一)</sup>（「ある意」は直前にある字と括弧内の文字とを入れ代えたものがある意）

また弟子が書いた形にしてある「司馬江漢視目鏡引札」（天明四年一七八四）の口上書（挿図I）のなかに

西洋ニ銅版鏤刻之法アリ支那及日本此法ヲ不<sup>レ</sup>作 画理ノ妙ニ不<sup>レ</sup>至作ルコト不能故ニ 先生此法ヲエムコト數年竟ニ卯ノ九月己ニ作レリ 其画理西洋ノ法ノ如シ 則チ日本ニテハ此法ノ創製也 後人工者ハ江漢先生ヲ祖ト知ル可シ 司馬江漢先生ハ日本銅板ノ創ナリ

とあり、創始者であることを主張している。

同様の引札でだいぶ後の文化六年（一八〇九）の蘭画銅版画引札といわれるものの中でも

先生日本ニて始めて製する者此蘭畫と又銅板畫とてあかねニ自身ニて彫刻して地球の圖天球の圖を蔵板にしてあり是も世の人能知る者なりと書いている。

その点は彼の著書でも同じように繰返し主張しているが、刊年の順に

神戸市立南蛮美術館蔵

挿図1 視目鏡引札

挿図2 視目鏡

挙げれば、寛政五年（一七九三）に増補版を出した「地球全図略説」の冒頭に

余繪事之餘暇和蘭舶<sup>キタフネ</sup>し來<sup>キタフネ</sup>ところの奇器畫圖の類を摹製<sup>モクセイ</sup>す嘗彼邦銅版の法を考索し己に諸圖を新製して人に示す

と述べている。次には寛政十一年（一七九九）刊の「西洋画談」、文化二年（一八〇五）刊の「和蘭通舶」の両書ではそれぞれに銅版画創製に至るまでの経緯を述べている。江漢はそこで始めて蘭書名を出しているが、これは本稿の最も主要なテーマであり後に引用詳述するが、その蘭書訳読の協力者と創製の時期に関しては

向我玄澤大槻氏<sup>(10)</sup>と謀りて。之を譯し。天明癸卯歲 竟に此製作を考へ日本始て草創するものなり（西洋画談）

玄澤大槻氏ト謀テ竟ニ銅版ノ製作ヲ考フ 是日本始テ草創スル者ナリ（和蘭通舶）

と同様の表現を繰返している。

さらに文化五年（一八〇八）刊の「靈鷲山図説」の附録「靈鷲山図」の解説には

原本ハ彼ノ國ノ畫圖ニシテ皆眞ヲ模スノ法ナリ見ル者其土ニ遊ビ其物ヲ觀ルガ如シ 版ハ銅ニシテ彫鏤ノ巧ナル事言葉ナシ 然ルニ吾ガ日本此ノ銅刻ノ法ヲ知ル者ナシ 豫曩ニ天明癸卯ノ秋始テ吾國ニ草創ス 尤モ自画自刻ニシテ天球地球及ビ瀕海ノ圖其ノ餘ノ諸圖コト々々予ガ家ニ蔵ム

と、以上列挙してきたように主張している。さらに文化十二年（一八一五）に約三〇年前の天明八年の日記を書き改めた「西游日記」の中でも、八月十八日の条に大阪の木村兼葭堂を訪ねた時の様子を

吾が造る銅版兩國の圖を見せけるに誠に日本創製なりと云て感心する

司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

と死ぬ四年前にも銅版画の日本創製を改めて述べている。

江漢が銅版画創製のために蘭書の訳読について教えを乞うた人は大槻玄沢であることは前出の通り自著に述べているが、その玄沢の処女作と目される「和蘭鏡」の序、跋文を大槻文書の中から発見された岡村千曳氏はその全文を紹介された。<sup>(11)</sup>その跋文を見ると筆者が司馬江漢であり、彼はそこでも「今や始めてその法を考へ、これを本邦に創ることを得たり」と創製を述べている。しかも彼が「西洋画談」などで触れたよりもより詳しく玄沢が江漢ら（この複数の表現「余等」あるいは直ぐ後の「二三同好之士」という二三が誰であるかは知り得ないが）の請いにまかせて蘭書を講じた状況が判明するので全文を引用する。

#### 和蘭鏡跋

余有畫圖技術之癖、畫則倣漢方以爲生業。後觀和蘭所載來畫圖及器械、其精妙不可言。因欲學其法。有所造制、然其術其法捨蘭書何以哉。大蠟先生<sup>(12)</sup>大槻玄澤<sup>(13)</sup>之從事于此學也固已久矣。余等欽仰不可已、扣其門就塾而謀焉。或與二三同好之士、刻日請先生於茅堂、講其書、議其說、相誼相咨者有年于茲。研精之餘、略知其一端。如書中所說銅版鏤刻、今也始得考其法創諸於本邦。其他如此類亦復不少。雖欲得其人俱與成之人每若其難入、於是就先生請焉。先生笑曰、子欲成之速。見卵而求時夜不亦太早計乎。昌平之所嫗育固將有其人。子姑舍焉。及其固請也先生遂著書二篇、名曰和蘭鏡。此書也、雖固惟初學之階梯、不務甚高論、實三千年來所未說也。豈不一盛事哉。峻等不堪踴躍之至。因記其略云爾。

天明癸卯秋九月

東都江漢司馬峻識

この跋文の日付は江漢の腐蝕銅版画の第一作「三圍之景図」と同じ年



月である。従って江漢は最初の銅版画を完成した時、はやくもその創製の状況をこの跋文の中で述べたことになる。以上江漢自身の創製を主張する文書を取りあげてきたが、次にそれらに関係があり、あるいはまた裏付けとなる文書を挙げる。

右の主張に関連のある他の文書

大槻玄沢の著書「蘭学楷梯」の刊行は天明八年であるが、成稿したのは天明三年であり、その例言には「天明癸卯季秋（九月）」の日付があり、その中に

項カキ口同臭ノ士來テ此學ノ大法ヲ示サンコトヲ請フテヤマズ、故ニ不才ヲ顧ミズ、比編ニ卷ヲ傳シテ其需ニ應ズ。

とあり、前記江漢の跋文と合致する。

また大槻玄沢は江漢の著書に題言を撰んでいる。それは江漢の著述の初期のもので、前出の「地球全圖略説」の序の「題地球全圖」であり、寛政壬子之冬（一七九二年）磐水平茂 撰とした漢文である。それに依れば銅版創製のために蘭書を学ぼうとした江漢が玄沢にその説明を求めたこと、またその地球全圖の原図は玄沢の所蔵であったことが判る。なおその後段の文章は江漢の銅版画創製に直接の関係はないが、その全圖作製に対する江漢の考え方が「我邦の人は地理に暗いから詳細を書すより万国の広い事のあらましを知らせれば足りる」としていたことが判る。<sup>(二四)</sup> 原文の前段のみを引用する。

君嶽江漢氏素善丹青兼好技巧嘗慕荷蘭之聲彼之所舶珎器圖畫之類模倣擬製者不爲尠蓋荷蘭之國工手諸技畫圖之寫真器械之使用至精至巧令人瞠視君嶽嘗讀

其書欲傳其法就余切磋之往歲欲考究彼邦銅版鑲刻之法乃問余其說以造意之創製銅鑲以示諸世觀者無不感賞（以下略）

なお玄沢は「磐水先生隨筆」卷三でも

江漢が余が譯言ニテ鑲刻ノ事ヲノミコミタル類ナリ

と述べて江漢の蘭書による銅版製作の技法の習得が玄沢の訳によったことを証している。

そのほか江漢の創製に触れたものとしては、寛政甲寅（一七九四年）から丙辰（一七九六年）の間に「退閑雜記」を書いた楽翁松平定信はその卷之二に銅版画について述べた項があるが、その始めの部分に<sup>(二五)</sup>

銅版鑲刻蜜製にあれど 我國にてなすものなし 司馬江漢といふものはじめて製すれども細密ならず ことにいいたう秘して、われのみなすてふ事をおふなり

と江漢の秘密主義や独善性を批判しながらも彼の創製は認めている。

なお寛政八年（一七九六）の蘭学者之居番附の中に<sup>(二六)</sup>見られる

銅屋の手代こうまんうそ八 司馬漢右衛門

を、彼が銅版の創製者として絶えず自己宣伝を繰り返したことを当時蘭学者仲間で諷したものと岡村千曳氏<sup>(二七)</sup>は見る。いずれにせよ以上挙げたように、司馬江漢が蘭書を大槻玄沢に訳読してもらって技法を工夫し、腐蝕銅版画を天明三年九月に創製したことは確認できよう。

## 二、銅版画製作技法を述べた当時の文書並びにそれらに引用された蘭書

司馬江漢は銅版画創製を自ら主張し、それを繰り返したが、オランダ

人からの直伝ではなく、蘭書の訳読であり、それも大槻玄沢の力を借りてできたことであって、日本語で述べた文献の無かったのは自明である。しかし創製者江漢はその創作技法については、一七八三年の第一作後十六年経った寛政十一年（一七九九）の著書「西洋画談」では触れていない。その巻末に近刻とある「春波楼画譜」の中の「和蘭奇巧部」で天文測量の道具の造りやうを圖を以て示す、及其外、銅版の彫る法、押す法、水をめくらす法、萬力、總て彼國にて造る奇器、各々國益になる、風車水車の類、悉く圖を顯して秘傳を示す。（傍点筆者）と予告した。しかしその画譜は公刊される事もなく、文化二年の「和蘭通舶」の中の銅版画の項もまた殆ど同文のまままで技法にふれず、さらに十九年の歳月の後に彼は死んでいる。

### 紅毛雜話

しかし創製を誇る江漢が技法について公開しない内に、彼の最初の銅版画製作から四年後の天明七年（一七八七）に刊行された森島中良著の「紅毛雜話」の中で、腐蝕銅版画の製法が取りあげられている。この著述の内容の本来の性格はオランダの文物を主たるものとして、さまざまな面から叙述紹介した雑話集といったものである。そうした観点から銅版画という新種の美術について述べている。内容は蘭書のおそらくは要訳から、さらに簡潔に、製版の方法その順序印刷インク（<sup>二八</sup>）の材料つくり方印刷法そして腐蝕に使う腐らし薬Ⅱ「スタルキワール」の強力な作用を当時の薬品会で実見したまま描写している。この書は五巻から成っているが、その巻之四の第七番目にある。「附銅版の法」のみ引用しておく。

司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

### 和蘭の畫法 附銅板の法

扱銅版を鑿むる法は、銅板に白蠟を引き、代赭石にて下畫を附け、下に圖する所の具をもつて筋を引き、點を打つに、白蠟の上なれば、さまで功を勞するにも及ばず、扱其彫りたる跡へ、「スタルキワール」という腐らし藥を懸くれば、<sup>二九</sup>下畫の儘に腐れ入る事 鑿を以て餉りたるより鮮か也。此藥氣西洋にて製する物 吾家の藥室にあり。試に鐵針に糸を施してさし入るる時は、じわじわと泡立つ事 湯のたぎるが如し 良有つて引上ぐれば其色紫黒に變じ、是を折るに朽木の如し。銅眞鍮の盆に注ぎ入るれば、たちどころに數み縮む。その功のするとき事は、去歲躋壽館の藥品會の時、まのあたり見たる人もあるべし。「スタルキ」は強き事、「ワール」は藥水の蜜語なり。扱銅版の摺り様は、象牙か鹿角の霜にしたるを油にて煉り、彫目へ塗込みてとくと拭ひ 其上へ紙をかけて、<sup>三〇</sup>ト木にて壓するなり（挿図7参照）。くはしき事は追てしるすべし。

そして引用の始めにある「下に図する所の具」というのは、巻之四の最後十六帖の裏と十七帖の表の見開きに 鑿板之具「シヨメール」に載る所の図式なり として出した道具のことである。その図はシヨメール七冊本のうちの第五冊目（一七七三年刊、後の一七七八年版の七冊本として纏まって出た版も同じ）の二七二二頁にある図版Dの一部を模写転載したものである（挿図3・4）。したがってこの項の叙述はシヨメール七冊本に基づいたものである。

なお同じ巻之二の「鉄砲<sup>わな</sup>」（挿図5参照）の項に

左に写す畫圖は 譯官樽林重兵衛が「テッチンギ」<sup>名</sup>人よりゆづり受けたる「シヨメール」といふ書に載する所也。（中略）此書全部七卷あり、實に古今の大奇書にして、漏れたり云ふ事なし。樽林九阜（重兵衛が号）家兄の紅

毛學を好む事の厚きに  
感じて是を屬す。當時  
日本に只一部の書な  
り。

とあり、これによつて  
も中良が見たシヨーム  
ルは七冊本であること  
が明らかである。

#### 退閑雜記 次

出の松平定信のこの著  
述は「紅毛雜話」より  
約一〇年後のものであ  
るが、その卷之二の銅  
版画について述べた項  
は前書より一層詳しく  
技法について述べてい

挿図3 鍍板之具（「紅毛雜話」）

る。その項の始まりは先に江漢の創製を述べた所で引用したが、それに  
続けて

さるに備中松山の藩中にこのころなすものあり、殊に細みつ蝨製にたがはず  
とぞ、予もむかしこころみしが、蝨書などにあるを譯させてこころみしによ  
からず、人をもてかの士へたづね問たるに  
(二三)

銅版に炭の粉をもてみがき、その板を火のうへにのせ、せしめうるしとい  
ふをことにうすく銅色のみゆるほどにぬるなり、さて其板を三日ほどかはか  
(二四)

し、下繪かきて、ほそきたがね及は針などにて、其うるしをほりうがち、  
日のあたる所へ出し、藥を筆にて三四度もつけ、紙に酢をひきて その紙を  
もて 銅板の表にあて、一夜、屋の下などへ置き、あつき湯をもてそのうる  
しを去て 墨もて摺なり

#### 藥方

黒は鹿角象牙などを焼たる其粉に、糸の油を交。其銅版に糊うすき紙もてそ  
の墨をよくぬぐひ、猶手にてもよくその墨をとれば、墨そのくされたる畫な  
んどの方にのみのこるなり、

紅毛の紙をよく水にて濡はせ、またうるほはざる紙と二つかさねあはせて、  
銅板のうへにのせ、しめ木にてしむるなり、

かの士の言には、墨は油煙を用ひたるがよしと云  
ホイスシヨームルなどにも 銅板の製す事しるしあれども、かの蝨書の一  
失にて、その簡要にする事は、ことに略して書をけば、其法による事あたは  
ざるなり、せしめうるしつくるはかの士の考なり  
(二五)

白蠟に松脂を交へてつくるは蝨書にものせ侍るなり  
(二六)

挿図4 鍍板之具（シヨームル第五巻図版D）

定信は「蝨書などにあるを訳させて」とか「ホイス ショメールな  
んどにも銅版の製す事しるしあれど」と書き、腐蝕銅版画の製法が  
「ホイス」とか「ショメール」といわれた蘭書にあることを明かに示  
している。なお定信は同書の他の項にも「ショメール」を引用して  
いる。(二七)

#### 西洋画談

#### 和蘭通舶

江漢の両著がようやく出てくる。画談は寛  
政十一年（一七九九）通舶は文化二年（一八〇五）の刊行である。後者の  
卷之一の中に「西洋画法」、「銅版画」の項がある。但し「西洋画談」と  
は異なり、その「銅版画」の項の記述は少し短かいが、内容は殆ど変ら  
ない。それら両書のいずれにおい  
ても技法に関しては何も触れてい  
ないが、創製に至る経緯は僅かに  
異なるが書かれている。先づ「西  
洋画談」からその部分だけを引用  
する。

(二八)  
予壯年のとき。源内平賀氏なる者  
ハナシ話けるに。往歲阿蘭人彼國の銅版  
數百枚舶し來り。日本にて是を鑿  
がん事を示す。其頃の人思い浅  
く。敢て之を奇巧とせず。終に蘭  
人に反す。日本人彼國にて。板を  
銅にして刻す事を知らざりしに。  
夫よりして始めて知れり。然るに  
銅版に刻するの術を捜考る者なか

挿図5 鉄砲涼（ショメール第7巻図版第75より）

りしに。阿蘭書ボイスと云人の傳す書中に。銅刻を作るの技巧の法式あり。  
向我玄澤大槻氏と謀りて。之を譯し。天明癸卯歲。竟此製作を考へ。日本始  
て草創するものなり。(以下略)

次に「和蘭通舶」の「銅版画」では次のようになっている。

嘗て日本銅版ノ法ヲ搜考ル者ナキニ郷ノ年蘭人彼國ノ銅版數百枚舶シ來リ日  
本ニテ是ヲ鑿シコトヲ示ス 其頃ノ人思淺ク敢て之ヲ奇工トセズ 直ニ返ス  
是時ヨリ始テ銅ニ刻シタルコトヲ知レリト予壯年ノ時源内平賀氏ニ聞ケリ  
天明癸卯歲蘭書「ボイス」ト云ル書ヲ閱スルニ技巧ノ部ニコレヲ作ルノ法式  
アリ 玄澤大槻氏ト謀テ意ニ銅版ノ製作ヲ考フ 是日本始テ草創スル者ナリ  
(以下略)

両書の依拠した蘭書の扱いは「画談」では、阿蘭書ボイスと云人の著す  
書とし、「通舶」の方では 蘭書「ボイス」ト云ル書 と前者ははっ  
きりと著者の名とし、六年後の刊行の後者では書名と見做している点が  
異なる。また前述の「紅毛雑話」では「ショメール」、「退閑雜記」では  
「ホイス ショメール」と双方に「ショメール」がでてくるが江漢は両  
書の中では全く触れていない。

#### 長崎聞見録

江漢の銅版画に関して述べた前記二冊の刊行された六  
年の間に、京都の蘭科医である広川獺の「長崎聞見録」が寛政十二年  
(一八〇〇)九月に関西で刊行されている。五巻本であるが、その巻之五  
の最初に「すてれきわあとの事」が載っている。そこには蘭書名の引  
用はないが、腐蝕銅版画製作の原則に触れている。

すてれきは猛なり。わあとは水なり。蛮人持渡る水薬の名なり。此水薬い  
たつて猛烈なるものにて。試に紙などを漬けて引揚るに。忽に烟氣立のぼ  
る。銅鐵の類に點滴するに。みな腐爛す。蛮人銅板を彫るに。まづ蠟面に細

畫または文字などを彫りて。さて此の藥を彼彫たる蠟の間にながし入。一夕置きて其の蠟を洗い終すに。何の勞もなく。種々の彫刻なりと。成就するなり。まことに腐藥第一の猛水なり。稀に持渡れば公儀の御買上げとなる。爰をもって賣藥にはなきものなり。(以下略)

これより後にはすてれきわあとの製法を、その蒸溜のための装置図(挿図6)を入れて述べている。

### 厚生新編

江漢の銅版画創製の時期からは大分離れるが、森島中良、松平定信がそれぞれの著書に引用した「シヨメール」といわれた本の日本語に訳されたものが「厚生新編」である。「厚生新編」は文化八年(一八一二)から三〇年もの間にわたって、初めて幕府によって翻訳された百科辞典であった。原本の全部ではなく項目を撰んだ訳書で七十巻に及んだが、稿本のままで置かれていた。この中に宇田川玄真の訳で「銅版図蝕鏤法 和蘭「エツェン」という項が雑集第四二にある。そ

挿図6 蒸溜装置図(「長崎聞見録」巻之五)

の内容は今までに引用したような腐蝕銅版画製作の原則的な順序を述べた簡単なものと違い、大変詳細なものである。銅版画製作の実際から云えば「エツェン」の項は製版の技法のみで、印刷に関したものは同項の終りに

詳に『ガラヘレーレン』(彫刻術)及び『プラートドリュッケン』(版を押す術)の條に説く

とある通り原著には片仮名で書いたそれらの項にあるのが、「厚生新編」には訳述されていない。

ほかに雑集第三九に「インク」の項があり、そこにはさまざまな種類のインクの処方(三二)が載っている。その終りに「鉛版に用る墨汁製法」「又法」という項があり、凹版インクを煉るものに必要な「焼き油」の製法とそれによるインクの作り方が書かれている。以上の各項目の訳文に表われた製法の詳細さは原書の内容の豊富懇切さを察することができる。

「厚生新編」は後に「シヨメール」について述べる際引用することが多いので触れておいた。

以上のほかに創製の時期からは分離れるが高森觀好(三二)の「西洋画談」文化一一年(一八一四)刊は、当時の日本人の書いたものとしては最も具体的に製法を説明しているが、その記述の構成はシヨメールの「エツェン」の項の順序に従っており、その内容は大部簡略された面があるが、反面材料や用具に日本国内での可能な方法を工夫し、さらにシヨメールに出(三三)ていない独自の工夫を二、三項目ほどに加えている。また挿図も重要な資料といえる。(挿図7・8参照)

蝕銅版の特殊なやり方を書いている。<sup>(三四)</sup> なおそれより前、渡辺華山の「客坐掌記」天保丁酉（一八三七年）の条に、蘭書に依った腐蝕薬や防蝕剤の処方の記録があり、また別項には「シヨメール」の名も出ている。

#### 江漢と「ボイス」

腐蝕銅版画の創製の項で引用前述の通り、始めて蘭書をその目的のため訳読した大槻玄沢にしても、江漢自身にしても、それぞれ「読其書」（題地球全図）「講其書」（和蘭鏡・跋文）としてあって創製に近い時期に書かれたものであるのに書名がでない。

江漢は自著「西洋画談」「和蘭通舶」では重ねて「ボイス」の名を出したが「シヨメール」は引用しなかった。しかし江漢はこの両著より早く、玄沢が題言を撰した「地球全図略説」の中で、地図の銅刻を述べた箇所ではなく、地動説を紹介記述した所に「ボイス」の名を出している。

又近來西洋の人の説には日は正中<sup>アンチポッド</sup>にありて地は天を施月<sup>メソリ</sup>も一の世界にして此地を中心として施五星<sup>ヘクスター</sup>も亦皆一の地也と云説有 其全象を器に製してヲルレ<sup>(三五)</sup>レイ」と名づけたり 其圖説はボイスと云る人の書中にもあらましを載たり<sup>(三六)</sup> 余が相識如水松原氏なる人此器を新製せん事を企<sup>クラマツ</sup>（挿圖9・10参照）

「ボイス」を江漢が自著に引用したのはこの箇所が時代的に最も早いものである。その他に年代は判然としないが（おそらく文化年間と思はれるが）、<sup>(三七)</sup>「聴音機引札」にも

和蘭人ボイスと云へる書中ニ圖説あり先生<sup>ウキ</sup>閱して之を考へ製す

と書き、「常にたもとに入おき図の如く持ち口を耳の穴ニさし入ル」な

観好の「西洋画談」より後のものになるが、ついでに挙げれば、葛飾北斎の「絵本彩色通」弘化五年（一八四八）刊の後篇にも「ステレキワートル」の製法（説明図入り）、「くさらかしの仕かたをしめす」として腐

挿図8 プレス図（ボイス第6巻図版136）

挿図7 プレス図（「西洋画談」）

どちらも「ボイス」の辞典に見出すことができる(挿図12参照)。

江漢は彼の親んだ和漢の典籍については「春波樓筆記」「天地理譚」など晩年の著述に数多くそれらの書名をあげている。しかし江漢は蘭書も相当数閲覽していると考えられるに拘らず、彼の著書に書名——正確なものは期待できなくとも当時の慣しであつた撰者や著者名を以て書名に代えたり、長い書名の一語をとって呼び名とした云い方にせよ——十余冊を挙げているに過ぎない。しかるにボイスだけは以上の例だけでも少なくとも四回は異つた彼の著書に引用していることが判る。前述のヲルレレイは模刻をしているし、聴音機は引札の解説だけではなく実際に製作したようである。<sup>(三九)</sup>「ボイス」と親しみ利用したことは明かである。

# 江漢と「シヨメール」

刊本となつてゐる江漢の著述には確かに「シヨメール」を引用したもののは一つも見当らない。しかし寛政戊午十年二月十八日の日付を持つ写本「和蘭譚」<sup>(四〇)</sup>の中に引用した箇所がある。「和蘭譚」は二二項目を持つ「和蘭国談」と「おらんだ俗話」との二段に分かれてゐるが、後者のしかも終りの方に近く出てくる。その項を次に掲げる。(挿図13参照)

和蘭より持渡る細工にハ妙なる者多し 何れにて製する哉

彼國より持来る奇器一ツとして妙ならざる者なし 歐羅巴洲の内「イキリス」の都「ロンドン」と云所ヨリ製作する者尤勝る者なり其次をおらんだの都「アムステルダム」とす「フランス」の「ハリス」の都皆妙巧となす 何レぞ日本人とても人に替る事はあるまし 古く久ク煉たる故ニや かかる妙工をなす者なり

ど、このほかにも使用上の注意や図を入れたもので、今日の補聴器の素朴なものようである(挿図11)。以上の二例は器具の類であるが、いずれにしても「図説」を引用したもので、それらの原図と見られるものは

挿図10 オルレレイ (ボイス第8巻図版第193)

挿図9 天球全図・司馬江漢

彼諸國ニ比すれば唐も日本も甚タ新しく久しからず 未タ開けざるに似たり  
故ニ彼國より工出ス妙器ハ日本の人工ム事不能 然共久しく年を経て巧む時  
ハ彼にもおとるまし 日本的人生得小ニして何事も人に傳ふる事を惜ミ只一  
己の利潤にせし故なり 彼國の人ハ志し異て人に傳へん事を欲す 蘭書「ホ  
イス」「シヨメール」「コンストカヒ子ツト」など云書物ハ皆大卷の書なり  
皆益奇を造る書ニして畫圖を入れて符合の印を付手を取て導よふにしたる者な  
り 書面に不解所ありても畫圖にて能曉し安し 小等其書中を閲して西洋畫  
并ニ銅版畫及彫様押様其餘數品器機を作る(以下略)

挿図11 聴音機引札・司馬江漢

神戸市立南蛮美術館蔵

以上に見るよう  
に「其書中を閲し  
て」とあつて「ボ  
イス」「シヨメ  
ール」「コンストカ  
ヒネット」の三種  
のいずれが主であ  
るのかは明確でな  
い。しかし江漢は  
刊本の「西洋画談」  
の一年前に「シヨ  
メール」の名を出  
していながら、そ  
の後の刊本には全  
くその名を出さず  
「ボイス」一本で

通した彼の意図は判らない。十一年前の天明七年に出されて広く読まれ  
た刊本「紅毛雑話」で森島中良がすでに銅版画の作り方を「シヨメ  
ール」を引用して述べたり、前年に前編の出た松平定信の筆写本「退閑雜  
記」で同じく「シヨメール」に触れてあり、また江漢の秘密主義を批判  
したため、銅版画創製を誇っていた江漢としては、自己の開発した技法  
の原典に独自性と權威を持たせるため敢えて「シヨメール」を避けたの  
かも知れない。しかしもしそうだとすれば彼自身書いた「日本の人生得  
小にして何事も人に伝ふる事を惜み只一己の利潤にせし故なり」の言葉  
がそのまま江漢の「シヨメール」「ボイス」に対する処置を批判するこ  
とになる。ここでは彼自身「シヨメール」を引用した記述のあったこと  
を指摘しておくのに止める。

なお江漢が並べて引用したもう一冊の本「コンストカヒネット」につ  
いて述べれば、大槻玄沢が彼の「蘭学階梯」巻下の書籍の項で二十一種  
の蘭書名を挙げ、その始めの五冊に対して「右何れも天文測量、諸術芸

挿図12 聴音機 (ボイス第4巻図版第89)



の書なり」と

し、江漢がヲ

ルレイの銅

版着彩図の説

明の所で引用

したウーヘン

スコールと同

じと思える

「ウーヘンス

コールブー

ク」が一番目、

次に「ボイス、

ウワールデン

ブーク」、そ

の次の次四番

目に「コンス

神戸市立南蜜美術館蔵

挿図13 「おらんだ俗話」

トカヒネト」を載せている。その書籍の項にはシヨメールが最後の二一  
番目に「シヨメール、ボイスハウデレキウワールデンブック二冊増続七冊  
居家纂要の全書なり」として記載してある。「蘭学階梯」は天明元年（一  
七八二）起稿し、同三年成稿とされている。その頃の江漢と玄沢との交  
際を考えれば、江漢の挙げた三種の蘭書は玄沢の許にあったものかも知  
れぬ。したがって江漢の書いた「コンストカヒネット」と玄沢の「コン  
ストカヒネト」は同じものと見てよいであろう。

「コンストカヒネット」が今日日本に遺存しているかどうか調査して  
ない。しかしル・コントのフランス語原著のオランダ語版で建築、絵

画、彫刻、版画に関する知識を蒐めた総合的な技術宝典とでもいふべき

表題の二冊本の一七四五年にでたものがあつたことは判っているのでそ

れかとも考えられる。「ボイス」「シヨメール」の該当項目には、図は各

一枚づつしか入っていない。「コンストカヒネット」にどの程度入って

いたかは知り得ないが、果して江漢のいうように「画図にて能曉し安」

いものであつたかどうかは判らない。

以上のほかに当時伝来していた事の判っているオランダ画法書に次の

ものがある。森島中良の「紅毛雑話」の中の「和蘭陀の画法」の項に

「シキルデルブック」のことが書いてあり、図版も原書から模写転載さ

れている。その原書は G. LAIRESSE 著 Groot Schilderboek のこと

であり、一七〇七年初版で一八三六年の第六版まで版を重ね（各版とも

二巻本）、英、独、仏などの各国語に訳され、しかもそれらの訳本もま

た版を重ねている。<sup>(四三)</sup> 江漢は「西洋画談」「和蘭通船」に「コンスト・シ

キルドブックといへる書」を阿蘭人イサアク・チツシング（<sup>(四四)</sup> デッシング）

から贈られたことを述べている。後者の本が前者に相当すると見る考え

方が妥当か否かについては後述するが、中良、江漢両人の述べた限りで

はそれら両書の銅版画関係の記載の有無については知ることができな

い。

以上によって腐蝕銅版画に関して日本の文書に引用された蘭書は所

在、内容不明の「コンストカヒネット」を除きいづゆる「ボイス」と

「シヨメール」といわれた二種類にしばらくは。現在までに江漢が「ボ

イス」と述べていたためにボイスと見る見方、またシヨメールとする見方、あるいはその両方をとる見方の三通りがあった。<sup>(四五)</sup>次にその両書についてそれぞれの内容の詳細を見た後、腐蝕銅版画製法に対する扱いを比較検討したい。

### 三、「ボイス」「シヨメール」について

並にそれぞれに記載された銅版画関係項目

#### 「ボイス」について

ボイスとは BUYS, Egbert という人の編纂したオランダ語辞書のことで、当時「勃乙斯、術芸全書」といわれ、蘭学者の必備の書ともいわれた。原題は

Nieuw en Volkomen WOORDENBOEK

van Konsten en Weetenschappen bevattende alle de Tackken

der Nuttige Kennis

Amsterdam 1769—1778

訳せば「科学の諸分野と有益な知識のすべてを含む新完全技術科学辞典<sup>(四六)</sup>」となるが、全部で十冊ある。第一冊Aが一七六九年に刊行され、爾後毎年一冊づつ刊行され、第一〇冊T—Zは一七七八年に刊行された（第八冊のみ一七七六年に刊行されず、翌一七七七年には第八、九の二冊が出版された）。その構成や内容は扉によれば

多数の言語の異なる著者たちによって世界中の廣汎な地域から、凡ゆる事象を集め、優れた圖版を撰んで数多く入れてあり、内容としては自然科学の諸分野、すなわち機械、工具、道具、圖面（平面圖、天象圖）、設計圖、自然界の動、植、礦物（噴、流出物も含む）の正確な記述であること

司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

を謳っている。本の大きさは現在のA5版位で一頁あたりの語数は五〇〇語未満、総頁数は八三五〇頁。扉に謳われたようにこの辞典の特色ともいえる図版の数は多く、全十巻を通しての番号で二八二図版ある。一枚の図版には図が一箇だけというものもまれにあるが、大半は数図が頭文字を同じくすることを理由に内容の関連はなく詰め込まれたものが多い。したがって図の数にすれば図版頁数の数倍は入っていることになる。そしてそれらは全部腐蝕銅版で作られている。図版の利用に関して云えば前述の江漢始め当時の多くの人が利用し、模写<sup>(四七)</sup>している。それらの図版の中に全部木製の当時の凹版用手びき印刷機 KOPERE PLAAT-DRUKKERS PERS が見られる。挿画銅版画の八割には署名がないが、署名のある版画家はカレル・ヤコブ・ド・ユイセル C. J. de Huyser 生歿年は不詳だがオランダ十八世紀の人である。

#### 「ボイス」の日本伝来の時期

「ボイス」十冊本は一七七八年に完結してから日本に齎<sup>もちこ</sup>られたものか、第一冊目が一七六九年に始めてから、間もなく見ることができたものかは判らない。しかし江漢の銅版画の第一作のできた天明三（一七八三）年までには十冊全部か、その何冊かは不明であるが入っていたことが判る。それは前節でも述べたが、天明三年成稿の大槻玄沢の「蘭学階梯」巻下の「書籍」の項に他の蘭書と共に挙げられているからである。

往々舶來の群籍、諸家秘蔵する所にして、余等既に目撃するもの數十部に及ぶ、近來吾が輩の翻譯の業を起すの際、譯家より請ひ受て、各々家蔵するもの亦少からず、今二三を擧て左に記す

として二二種をあげ、その二番目に

ボイス、ウワールデンブーク

と載せている。

同じ天明三年起稿した玄沢の「薦録」の中の引証書目にも

「勃伊斯 庶物韻會」

として挙がっている。

ほかには前出の「紅毛雑話」の卷之三「火浣布」の項に

近頃蛮船のもたらし来る「ヒユブネルス」紅毛人「ボイス」上等が著したる書の中

に、委敷其製法を載せたり。

とあり、中良の兄、桂川甫周の物語として

往年蕃客の旅亭にて對話の時、火浣布の談におよび、鳩溪が送りこせたる石

麻を出して加比丹「アウレントウキルレンヘイト」に鑑定せしめれば（以下

略）

とある。鳩溪平賀源内が火浣布を作ったのは明和元年（一七六四）であ

るが、「アウレントウキルレンヘイト」は Arend Willem Feith のこ

とで彼は安永元年（一七七二）から天明元年（一七八一）まで全部で六回

商館長として江戸に來ている。（四八）その内の第何回目の時に火浣布について

對話したのか、またそれを「往年」とした記録は何時であるかは明確で

はないが、いずれにしてもそれまでには「ボイス」の書が入っていたと

見てよいであろう。

「ボイス」を今日日本各地で所蔵している処は十冊の完全なもの、冊数の揃わないもの合わせて十箇所を越えている。挿画については前述したように模写という形で見られるが、内容の利用については、「ボイス、

ナチュルなど必備の書を読むに至て初めてエレキテルの玩弄物にあらざるを知る」と阿蘭陀始制エレキテル究理原に出ていたり、厚生新編でシヨメールを翻譯する際、「ボイス」の図説を利用したことが判っている。その他硝子、活版印刷機に関する項（四九）などが翻譯されている。

「ボイス」にある銅版画製作関係項目

腐蝕銅版画 ETSSEN (第三卷 一七七一年)

彫刻 GRAVEEREN 彫刻刀 GRAVEER STIFT (第四卷 一七七二年)

版画家 PLAATSNIJDERS (第八卷 一七七七年)

印刷 KOPERE PLAAT DRUKKERY (第六卷 一七七四年)

インク DRUK INK (第五卷 一七七三年)

他にメゾチント MEZZOTINTO やステルクワーターテル STERK WATER が説明の分量は少ないが出ている。そして前述のプレス（第六卷）の挿図がある。

「シヨメール」について

「シヨメール」とは「居家纂要の全書」(玄沢)、「家治詞書」(鍋島家蘭書目録)などと呼ばれた日用家庭百科辞典であるが、「厚生新編」の表題で和訳されたものの原本であることは既に述べた。「シヨメール」はフランス人の牧師 M. Noel Chomet という原著者の名前を略称したもので、日本に齎らされたのはそのオランダ訳本であった。

オランダ訳本の初版は一七四三年の二冊本である。次に撰者が変はつて一七六八年から一七七七年までかつて七冊本の改訂増補倍版を出し

た。翌一七七八年にはその表題と造本を僅かに変えただけで、内容は全く同一の七冊本を出している。さらに一七八六年から一七九三年までに九冊本を一七七八年版七冊本の続篇として出した。この九冊本は前の七冊本と合せて十六冊本とも称した。其の後縮冊版の四冊本が出たり、十八冊本もあるというが後者については知らない。ここで取りあげるのは刊行年の関係から二冊本と七冊本の二種類である。

二冊本の総頁数は一四九六頁であり、七冊本は四三七〇頁となっている。両書とも本の大きさは同じ（二七×二二センチ）で活字の組み方も左右二段組であるが、二冊本の方は行数が僅か少なくすいた感じがする。表題はフランス原本の表題 *Dictionnaire economique* のオランダ訳であるから同じでよさそうなのだが二冊本は

#### HUISHOUDELYK WOORDBOEK

七冊本（一七六八—一七七七）は

#### HUISHOUDELYK WOORDEN BOEK

である。そして七冊本の一七七八年の表題はこれと異なるが、後の続篇の九冊本、あるいは正統いっしょにした十六冊も同じで

#### ALGEMEEN HUISHOUDELIJK, NATUUR,

#### ZEDEKUNDIG. EN KONST. WOORDENBOEK

と書かれている。ただし九冊本の扉には表題の上に *VERVOLG OP M. NOËL CHOMEL* として続編を明記している。この主表題のすぐ後の副題は「財産を殖やし健康を保持するための多くの方法を蒐めた」という意であるが、以上の三種とも同じで次のようになってゐる。

#### GOED TE VERMEEDEREN, EN ZIJNE GEZONDHEID TE

司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

#### BEHOUDEN

「厚生新編」の原本は一七七八年の七冊本で国会図書館蔵本とされているが、その「厚生新編」の初めにある『訳編初稿大意』に原本の扉に書かれている内容について

巻首標題に全部中集録收入の提綱あり

として訳している。要するに副題の示す通り生活の実益増大のために役立つような良法を示しているものでそのための大綱だけで十一件あるとしている。それらは牧畜、猟漁、園芸培養、物品製造、食品貯蔵、調理醸造などに関する実用項目や交易を営利するために用意すべき簡要法とか、諸芸術、及理学并技巧簡辯法、あるいはあらゆる職業の人の始めに知っておくべき諸件といったもので内容は多岐にわたった実用記事による百科辞典である。また別の所でも表題とその訳について

此書原版二卷なるものの題名を「ホイスホーデレーキ・ウワルドブック」と云、増続の本編（七冊本のこと）は補正改名の義上にあり。「ホイスホーデレーキ」といふ辭を譯すれば人各

家職を務め、それ／＼の生産を計り修めらるべき云々といふ語義あり。これに漢語をあてば厚生ともいふ義なるべし。（中略）

「ウワルド・ブック」は即ちそれら事物の寄語の書といふ事なり（以下略）

とも述べている。なお二冊本、七冊本のそれぞれのオランダ訳者やその刊行地についても一項を設け訳してある。長いので要点だけを述べれば本編原と式冊でできた本である。著者はフランスのメーステル・ヌール・シヨメールという人であった。南和蘭地方のゴウダのラテン學校のヤン・ロッテウエーキ・シキユールとウエステルという兩先生が和蘭文に翻譯増補したものを一七四三年レイデンとアムステルダムの本屋が印行した。後フリースランドのレーウ・フルワندنの人デ・サルモットが原著に就て大いにこ

れを増補訂して、遂に七巻の本とした。<sup>(五二)</sup>

というふうになっている。以上「シヨメール」の二冊、七冊の両種の成り立ち、その関係、またこの辞典の特色を記してきたが、二冊本と七冊本に見られるそれぞれの挿画がどのような関係にあるかを述べておきたい。

#### 二冊本、七冊本の挿画について

「シヨメール」七冊本の挿画の一枚 Plaat D が「紅毛雑話」に「鑊板之具」として転載されていることは前述した。その他にも同書の「鉄砲強之図」も「シヨメール」から模写転載している。原図はVの所の Plaat 75 の狐などをみる罌が三種のついている中の中央の鉄砲をしかけた狐狼用の罌の図を模写したものである。同じ七冊本の図版番号に数字とアルファベットの両方の表示があるが、それは七冊本だけでは判らないことで、二冊本との関係を知ること始めて納得がいく。

二冊本には第一巻A—Mの始めに口絵が一枚、挿画は二巻の通し番号で、一から三三、第二巻N—Zには口絵はなく三四から八〇までの図版がある。そしてこの八〇枚の図版の図柄はそのままで撰者も内容や量も変わった七冊本に全部引き継がれた。内容を増補改訂して約三倍近い頁数にふくらみ、冊数も七冊になったデ・シャルモ版は二〇枚の挿画を加えた。それらにつけた図版番号は Plaat A から Plaat V までのアルファベットであり、そして第二冊から後の六冊に分散して加えられている。<sup>(五二)</sup> 七冊本に組みこまれた八〇枚の画の内容は同じであるが、頁数など欄外の文字は当然彫り変えられている。七冊を一七七八年版として表題を変えて出した版の口絵では欄外には

TE LEYDEN en LE EUWARDE By JOH. LEMAIR en H. A. DECH  
CHALMOT 1778

と撰者と出版地の文字を彫り加えた。

アルファベットの図版番号をもつ二〇枚は四半世紀を経て増補改訂された七冊本の内容が時代と共にあることを示している。その最もよい例が図版Dであろう。そこに示された道具類は銅版画の製版技法の一種であるクレヨン技法のための専用のものである。その技法とはクレヨンなどの柔かな筆触をそのまま銅版画に再現しようとするための技法であるが、そのクレヨン技法についてA・M・ハインドは次のように述べている。<sup>(五三)</sup> フランスのフランソワ Jean Charles FRANCOIS (1717—69) はデマルトオ DEMARTEAU (1722—1776) ルイ・ボネ Louis BONNET (1736<43?>—1793) の二人とその技法の発明を宣言し、一七五七年にはフランスのアカデミイロワイアルに受け入れられ、その翌年彼はさらに称号と年金を与えられた。それによってクレヨン技法は実質上承認されたことになった。したがって四三年版の二冊本に掲載がないのは当然であるが、挿画に関連して、そうした時代の変遷に七冊本が敏感に反応していることを指摘しておきたい。

なお挿画々家は口絵はヤン・プント Jan PUNT (一七一一—一七七九頃) オランダの画家、彫版家である。二冊本と七冊本の新しい分にもサインをいれて最も数多く描いている画家はF. de BAKKER。サインでは彫版sculp.も少数ある。他に画家、彫版家とつづB. PICARTやSPYKのサインが見られる。

## 二冊本、七冊本の日本伝来の時期

既に述べたように「シヨメール」に関しても大槻玄沢の「蘭学階梯」の書籍の項にでている。

シヨメール、ホイスホウデレキウワールデンブック二冊、増續七冊居家纂要の全書なり

これで天明三年までに「ボイス」と共に二冊本、七冊本とも玄沢の手許にあったと見られる。また二冊本の現存する香川大学、神原文庫蔵本の表紙には二冊とも JOSIWO KOOZAYMON と墨書のサインがあり、また JOSIWO の小さな朱印が本の頁の処処に押してある。それは吉雄耕牛の蔵書であったことを示すが、幸左衛門を称していた時期からその二冊は安永五年（一七七六）より前に入っていたこと、二冊本の玄沢家にあったものは山片重芳から借りたものであることが既に知られている<sup>(五四)</sup>。玄沢は「薦録」の引証書目に「削墨児<sup>シヨメール</sup>」と書き「特に其図を取る」としてある。それは石川大浪に模写させた「荅<sup>タ</sup>跋<sup>バ</sup>草<sup>コ</sup>並荅<sup>タ</sup>跋<sup>バ</sup>鶴島土人図」を指すが、その原図は Plaat 57 である。その図は二冊本にも七冊本にも前述の通り載っている。

七冊本については「紅毛雑話」の記述を引用したがテッチングすなはちイサアク・チチングの商館長として来日したのは安永八年（一七七九）から天明四年までに四回、江戸には安永九年と天明二年に二回きてい<sup>(五五)</sup>る。それらのうちのいずれかの機会に樽林重兵衛がゆずり受け、それが桂川家に入ったものであろう。

二冊本の日本に現存するものは稀のようであるが、七冊本から後の版になると各地に所蔵されている。典籍秦鏡や日本からの注文の記録を見<sup>(五六)</sup>

司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

ても長い期間にわたって需要があったことが判る。「厚生新編」を始め、翻訳されたり、引用された項目は多く、蘭学者の参考書として重用されていた。

## 二冊本、七冊本に見られる銅版画製作関係項目

「ボイス」もこの「シヨメール」の二種類もともども銅版画創製の頃までには入っていたことは判明したが、創製者の江漢、訳読者の大槻玄沢とも「其書」というだけで当時明確に書名を挙げていない以上、技法関係の項目があればやはり考察の対象とせざるを得ないだろう。七冊本に關係項目のあることは「厚生新編」に優れた翻訳があることで既に明かであるが、二冊本は如何かといえは多くの項目はなく第二巻に彫版法プラートスネイデン PLATSNYDEN のただ一項目があるのみである。それ以外には印刷インクに関して第一巻の INKT の項に DRUK-INKT がある。

七冊本では和訳された ETSSEN が第二巻、一七六九年、彫刻版画の項として彫刻法 GRAVEER KONST が同じく第二巻、彫版法 PLAATS-NIJDEN 第五巻一七七三年、印刷法 PLAATDRUKKEN 第五巻、インクは DRUKINKT 第三巻一七七〇年があり、他に STERK WATER 第六巻一七七五年や短い記述だが MEZZOTINTO の項が第四巻一七七一年に見られる。以上挙げた「ボイス」「シヨメール」の各項目の内容を検討比較して実作上最も有効なものが何れであるかを次章で詳述する。

註

(一) 宗教画に対する日本国内の需要の状態を訴へた宣教師たちの書翰については、キリ



シタン研究第七輯 シュッテJ・F・「ヴァチカン図書館所蔵バレット写本について」中のヨーロッパ製の絵画と原版に多く引用されている。

(二) 前掲書 「銅版彫刻学舎の始め」で、「その創立は、巡察師ワリニアノの二回目来朝（一五九〇年七月二十一日）後間もない頃であったように思われる。」としマッコール JOHN E. McCALL は「一五八五年有馬にそのために派遣されたジョヴァンニ・ニコロ Giovanni Niccolo（一五六〇—一六）が彼の画学舎を発足させたに相違ない。」と述べている。Early Jesuit Art in the Far East 1947

(三) マッコール氏は前掲論文中で「一五九〇年七月ヨーロッパの印刷機の到着によって、ニコロは彫刻銅版画の技術を教え始めることができ、同年彼の生徒のひとり聖ペテロ（バレット写本中にある銅版画の一枚のこと）の（一五九〇の）年記を入れた銅版画を作った」と述べている。シュールハンマー師は「印刷機といっしょに印刷者として来た本修道士一名が字型の製造と彫刻銅版画を若い日本人たちに教えた」と述べている。Georg Schurhammer S. J. Die Jesuitenmissionare des 16 und 17. Jahrhunderts und ihr Einfluß auf die Japanische Malerei. 1933

(四) シュールハンマー 前掲書 一九頁

(五) エドアルド・キヨソネ Edoardo Chiosone 1833—1893 イタリア、ジェノヴァの人。フランクフルト アン マインのドンドルフ印刷会社の有価紙の原版彫刻師として在職中、日本の大蔵省紙幣寮の招聘に応じて来日。銅版の本格的技術を伝えた。しかし紙幣印刷の極秘性から、彼の技術が実用凹版の面に発揮され継承されても、一般に公開されることはなかった。その間の状態については西村貞「日本銅版画志」玄々堂録山と明治初期の印刷文化三九—四頁、小野忠重「版画」岩波新書 銅版の復活——民間の銅版あたりに見られる。実技上の特殊性が現代の印刷局彫刻課などに残っており、今日の世界の彫刻銅版画の製作方法と違う点は拙著「銅版画の技法」八四頁参照

(六) 野呂元丈（一六九三—一七六一宝暦十一年）は寛保元年（一七四一）に阿蘭陀禽獸蟲魚図和解（ヨンストンスの書の抄訳）の序の部分で次のように述べている。

一 畫ノ所ハ銅板ナリ文字ノ所ハ鉛ナリ鉄デモ彫レハ鏤出テ不宜ユヘ近コロハミナ鉛錫ヲ用ト云 蘭学資料研究会、研究報告第三一号 岡村千曳 ドドネウス CRUYDT・BOECK の邦訳「遠西草木譜について」

(七) 歿年は文政元年（一八一八）であることは明かだが、彼の著書などから生年には二

説あり、延享四年（一七四七）元文三年（一七三八）となり未だ明確にされていない。また彼の生家や彼自身の生いたちも判っていない。司馬江漢を名のった理由は彼の「春波樓筆記」に、「名は峻、姓は司馬、字は君嶽、号は江漢とす。峻嶽を以て名字とす。」とある。

(八) 江漢の風景銅版画の殆どは覗眼鏡を透して見るもので、表題の文字は勿論、実際の景色も左右逆向きに印刷しなければならなかった。つまり原版には表題文字はそのまゝ、風景は実景通り描けばよいことになる。また覗眼鏡用の銅版画は手彩色をほどこしてあった。それらの風景銅版画の画面の大きさも装置の関係からか一定していたようで二八・五×四一・五センチほどの横物である。風景銅版画の製作期間は主として天明年間に集中している。

(九) 前述の風景画と違い、覗眼鏡用でない少数の銅版画作品のうちの一点。一一・五×九・六センチと小さく、彩色していない。画面内の向って左にあるのは凹版用プレス、左の部分の横向きに背中を見せた二人のそばにあるらせんのついた垂直の棒の上部に棒がでているものは、恐らく凸版印刷機で、人物はそれを操作していると思われる。中心の画架に向っている人の後で背中を丸くしている人物は印刷の具合を眺めている刷師の一人と思われる。十七・八世紀の印刷工房の内部風景を描いたエッチングなどを連想させる図柄であり、画面内部への開放部分やその奥の風景から原画のあることを想像させる。

(一〇) 宝暦七年（一七五七）—文政十年（一八二七）名は茂質字は子煥、玄沢は通称、磐水と号した。安永八年（一七七九）から前野良沢の門に入ったが、その門下同好の諸子として「蘭学階梯」の中で江漢の名を挙げている。江漢との交際はこれより始まったものか。「六物新志」天明六年刊に江漢は人魚の挿画を描いている。しかし寛政六年以降は離れていたと思はれる。なお江漢と蘭学社中との関係については佐藤昌介著「洋学史研究序説」一一六頁 註26、後述の註(一二)の「盲蛇」、あるいは岡村千曳「紅毛文化史話」一八五—一八八頁など参照。

(一一) 大阪の市井人坪井屋吉右衛門のこと。元文元年（一七三六）大阪生まれ、享和二年（一八〇二）歿。代々の酒造家。博物学の好事家、著述もあるが、江漢との交友については、黒田源次「江漢西遊日記」の「司馬江漢西遊日記について」三八—四三頁参照。

(一二) 早稲田大学図書館月報第十九号 大槻玄沢「晚港漫録」

(一三) 前掲 月報 岡村千曳「和蘭鏡序跋について」

(一四) このような考え方は寛政四年刊の「輿地略説」にも既に述べているし、「地球全図略説」の始めにも述べている。

(一五) 宝暦八年(一七五八)―文政十二年(一八二九) 將軍家斉の老中職を天明七年(一七八七) 六月から寛政五年(一七九三) 七月までつとめた。定信が直接名指しで江漢の銅版画製作の秘密主義を批判したこの項と対照的に、江漢が彼の「春波樓筆記」に書いた「白川侯博学敏才にはあれど、地理の事においてはまだ究めざる事あるに近し」が定信の対露政策を批判したものとしてしばしば取り上げられる。

(一六) 岡村「紅毛文化史話」寛政時代の洋学者番附二種。

(一七) 宝暦四年(一七五四)―文化五年(一八〇八) 兄は「解体新書」の翻譯者の一人であった桂川甫周で、桂川家は代々私蘭流外科医で、平賀源内の門弟となったこともあり、江漢との交渉の程度は不明だが、多才な人で仕事は多方面に亘った。小野忠重「紅毛雜話」 岡村「紅毛文化史話」 桂川甫斎等参照。

(一八) Serkwater オランダ語強水と訳す。その薬性の強さは本文で引用の文献の他にも多く見ることができる。

(一九) 斜めに版板をたてかけ腐蝕薬をかける方法のこと。流れ落ちた液は下に磁製のかめを用意して受ける(図版Ⅱ参照)。他にも腐蝕薬の使用法はあるが、後出

(二〇) 官設薬品会は天明元年(一七八一) 五月、同二年五月、同三年夏、同四年五月に開かれた。その会場として明和二年(一七六五) 神田佐久間町に開校された躰壽館が始めの内使用された。同館は寛政三年(一七九一) その制度が改められ官立の医学校となる。始めて本草会、薬品会といわれたものが開かれたのは十八世紀中頃からで、次第に大規模になり物産会といわれ、薬用植物などを主とした薬物の品評会であった。学者相互の研究、一般民衆への天産物の知識と趣味の普及を目的とした。なお平賀源内の「物類品隲」六巻は宝暦七年から十二年迄に五回本郷湯島で行なわれ物産会の出品物二〇〇〇種の中から三六〇種を撰んでつくられた。

明治前生物学史Ⅰ 二二―二二五頁参照

(二一) 後述本文の「シヨメール」について あるいは拙稿 蘭研報告第二二八号「シヨメール オランダ語版について」参照

(二二) 松原右仲のこと 岡村「紅毛文化史話」忘れられた銅版画家松原右仲参照

(二三) 定信がこころみたという実際については不明

司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

(二四) 漆を採った後、さらに細い技を庖丁でしめつけて採った漆。「せしめ漆」は水分が少なく下地に適すとされている。(松田権六著 うるしの話 岩波新書二九頁)「西洋画談」(後出)を著した高森親好は漆にも詳しく「漆髹秘録全」を口述している。その中に

一脊<sup>ベ</sup>といふハ。木も枝も切取。長サよき程ニ切取りて。沢水にても。溜りたる水のある所江。浸し置時は。木の両方より漆流れいずる也。是を取たるを脊<sup>ベ</sup>といふ。則木より<sup>ベ</sup>出すといふ心なるべし。

一又脊<sup>ベ</sup>ハ。至て強き故。地漆。むき漆。つき立。等にはよけれども。つやがなき故。上塗にならず。故に脊<sup>ベ</sup>ハ下地ものと心得べし。

このうるしと金属面との密着防蝕性、腐蝕のおわった後それをはがすことについては実験してないのでその程度についてはまだ不明である。

(二五) 定信がどの程度ホイイス シヨメールを訳読したか不明だが、少くともこの項に記された腐蝕の方法に該当するやり方はそれらの蘭書には見当たらない。

(二六) 腐蝕を行う際、腐蝕を必要としない箇所の版面を保護し防蝕剤としての役目をはたすものとして先に「せしめうるし」を出してあったが、白蠟に松脂を交へてつくる処方方はホイイス シヨメールには出ていない。本文で後述するようにホイイスの辞書にはエッチングに関する必要な薬品類の処方を具体的に出した箇所はない。シヨメール一七四三年二冊本では

アスファルトを基本材料とした、夏<sup>ニ</sup>硬、冬<sup>ニ</sup>軟の二通りのニスを用いる、としてあるだけで他に腐蝕作業の途中で描いた線の腐蝕を中断する場合に油とヘット(Olie en Vet)の混合物をこすりつける、としている。鉄また銅版への彫刻の場合に用いる混合物として白鉛二に対して白ロー三を加え、それを融かして棒状にしたものという処方がのっている。

七冊本に載った分は後に「厚生新編」に訳出されたが

「ビウルゴンデゼ」(地名<sup>デゼ</sup>、<sup>デゼ</sup>、松香 各四十錢、右二品を新タなる壺の能く<sup>ベ</sup>湧<sup>ベ</sup>葉<sup>ベ</sup>をかけるものに入れ 火に上せて溶<sup>ベ</sup>し 此に胡桃油或は亞麻油三拾二錢を加へ煮て 其薬料少許を指の間に取て絲を引くほどに至り 是を其熱に乗して清き布片にて濾過し清き壺に入れ棒の形と爲し 是を取り硝子壺に入れ其口に獸の膀胱を覆ひ帖して固封し貯う 他に「カルロット」(Jaquet Callo)の処方とし



上好透明の亜麻油を熱して同量の乳香を加へる方法と次の

白蠟 十六銭 「ビウルゴンヂセ」 諸 八銭 「アスパルト」 十六銭

の三材料を調合加熱して作る方法がでている。

(二七) 卷之一に ショメールという蜜書に痘は疫なりとて、専ら解毒の治法を記し……

卷之二には ショメールに枕のようなもの、鶏の糞と毛をいれ、玉子をたてにして、(中略)廿一日めに卵をわり鶏を出すといふ

并にショメールが考には火の勢ひをもて卵をも生じぬべしとのみ書をけり。

また定信がボイスの辞書を見たすればリユクトポンプを書いた項や、ボイスの鼠を硝子鐘にいったその挿図ではないかと思う。「鼠鼯等の生物を入れ、死活をなさしむる器」で「其窮理の書に図説ありとや」となっている。ボイス以外の蘭書に出ていたのかも知れない。卷之一、二の両巻にリユクトポンプを扱った項がある。もともと大槻玄沢の「蘭説辨惑」巻下にも「りゆくとはむぶ」のことが書かれており「殺活車」と題している。

(二八) 江漢が平賀源内のことを書いたのはこの他に「春波楼筆記」の中にある。江漢は源内から和蘭関係の文物について多く学んだと思われるが、この壮年というのは何時頃の事か不明である。なお銅版画については当時源内所蔵の蘭書の挿画からも啓蒙される機会があったと考えられる。

(二九) 他に多くの著述があるが、その中の「蘭療方」「蘭療葉解」は共に文化三年(一八〇六)刊、前者の巻末には山口素絢の画いた「器物図説」の木版図があり、外療器機につき図説してあるが、その中に蒸溜器の解説がある。また後者の巻末には藤若子の薬物写生図が銅版画で入っている。西村貞「日本銅版画志」 広川癡著蘭療葉解の銅版図について二三五—二四四頁参照

(三〇) エツセン EISEN

ガラヘーレン GRAVEREN

ブライトドリュッケン PLATDRUKKEN

技法項目の比較本稿の下に詳述

(三一) 「厚生新編」に訳出されたインクの各項は次の通り

藍澱

羅甸「インデコ」

和蘭「インデス・ブラウ」

墨汁 羅甸「アトラメンチュム」

和蘭「インキト」

尋常の墨汁製法

懐中に貯へて便利に墨汁を製する法

隠顯墨汁の法

紅墨汁製法

殷紅の墨汁製法

青色墨汁製法

又 法

そしてこの後に鉛版銅版に用る墨汁製法、又法が訳出されている。

(三二) 「西洋画談」隨筆文学選集第二 高森親好の口述を渡辺以親が筆録したもの、原本は国会図書館蔵、また西村貞「日本銅版画志」高森親好とその著西洋画談参照 親好は寛延三年(一七五〇)水戸生れ、文政十三年(一八三〇)歿

(三三) 日本国内で可能な方法とは、鉄の針に代えるに「鯛の牙をとりて竹か木にてしばり、牙を荒砥にてさら／＼とき 漆にて柄にしかとしこみ遣ふなり」

ステルクワデル||腐葉の処方はショメールとは違う。天明末年頃桂川甫周の許に在塾していたと親好の門人が述べているが(西村、前掲書一〇八頁)「西洋画談」のその項で

桂川法眼の所蔵に蘭渡の「ステルクワデル」有弘良擦瓦<sup>ワラス</sup>の徳利に入是をこゝろみるに鉄針線鏝の類を入ると忽ち徳利の内むら／＼泡だち是を引上れば鉄の性ぬけて鉄針はき／＼と折れるなり是薬性の甚しきを見るべし扱比もの桂川氏にありて始めて日本にて銅板を創製することを得たり、(この親好の言を真とするならば、日本創製の江漢の最初の銅版画の腐蝕は桂川家にあった和蘭渡りの硝酸で行ったことになる)それをつくる親好の処方は独自で 生エンセウ 拾匁、ロウハ 五匁、丹礬 拾匁、水銀 三匁、礬石 五匁 雲母 三匁 となっている。今日の化学知識では効果の判別し難い薬品も入っているようである。以上の薬品を蒸溜する方法も独自である。

また当時の記録としてプレスをこれほどはつきり示したものは他にない。

独自の工夫とは腐蝕薬の処方もその中に入るが、「せしめうるし」を以て防蝕剤とすること、「銅板の如く木に彫て其形鮮明なる仕方」というのがある。これは木板を台に

して漆を塗り、それを彫って凹版とする彫刻木凹版とでもいうべき方法である。

さらにプレスを使用せずに凹版を写し取る方法として、木綿ぎれが布団状につくった中に小糠の細粉のしめったものを入れ、銅板の上にうつさうとする紙をしいて、その直ぐ上にこのぬかぶとんをあてて上から足でまんべんなく踏付ける方法を述べている。

(三四) 「絵本彩色通」は北斎の死の一年前に刊行の本。彼は自分で著した方法を実践したかどうかは不明。腐蝕等の処方も独自であるが、その蒸溜の図は親好のものと同く似ている。「くさらかしの仕方」は凹版というよりは今日の印刷用の凸版をつくるのと同じく、線の部分に防蝕剤（ペンがらをぬの油にとかしたもので描き、他はそのままにしておくのであるから、エッチングの用語でいえばオープン・バイトというのに相当する。

(三五) 江漢自身このラルレイを「ボイス」の挿画から殆どそのまま銅版面に模刻し手彩色したものが「天球全図」（寛政丙辰の年記あり）という中に「尾耳列礼図解」として入っている（神戸市立南蛮美術館蔵）しかし木版によるその図の解題に「……予今始テ此器ヲ創製ス図スル所ノ原ハ蘭書胡質<sup>モ</sup>和哥爾ニ載ル所ノ者ヲ模写シテ以テ茲ニ出スノミ」として原図はウーヘンスコール（註（三八）及12参照）だと述べている。

(三六) 松原右仲のこと 註（二二）参照

(三七) 西村「日本初期洋画の研究」晩年の司馬江漢 三九六—七頁参照

(三八) ( )内は表記蘭書を引用記載した江漢の著書名

1 アンブルシッド・ニョウス（西洋画談）「アンブルシ」ド・ニョウス（和蘭通船）アンブルシツは次に書くようにドドニョウスの名前ランベルテウスのことをいのか、「アンボイス貝譜 G. E. Rumphius : L'Amboinsche Rariteit kamer, 1705」と当時云われたもののことを指すのか不明。ドドニョウスの本の原名は Rembertus Dodonaus : Cruyds-Boeck, Antwerp, 1644

2 ヨンス。トンス。（西洋画談）ヨンストンス（和蘭通船、春波楼筆記）Jan Jonstons : Nauwkerurige Beschryving van de Natuur der Vieroeitige Dieren, Vissen en Bloedloze Water-Dieren, Volgen, Kronkel-Dieren, Slagen en Draken, Amsterdam 1660

3 コンスト。シキルド。ブーク。（西洋画談）コンストシキルドブーク（和蘭通船）この本については不明。註（四四）参照

4 ボイス（西洋画談、和蘭通船、地球全図略説、聴音機引札）原題など後述本文参照  
司馬江漢創製の腐蝕銅版画技法の原典について 上

5 ゼー。スピーゲル。（地球全図略説）Zee Spiegel 本木良永訳といわれる阿蘭陀海鏡書和解（航海書）がある。原本不詳。

6 フランカールツ「アナトミイ」（和蘭天説）アナトミイ（独笑妄言）当時歩<sup>ベ</sup>ー<sup>ル</sup>加<sup>カ</sup>児<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>体<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>といわれたもの。原題は Stephan Blankaart (1650—1702) Nieuwe hervormde Anatomic

7 「ハルレンティン」（和蘭通船）花連<sup>ハナツラ</sup>的<sup>テキ</sup>印<sup>イン</sup>（六物新志 靈鷲山図説）François Valentyn : Beschryving van Oud en Nieuw Oost. Indien, Dordrecht, Amsterdam, 1724—26, 5 vols.

8 「ウエイレルドベシケレイヒング」（春波楼筆記）Wereld beschrijving か、朽木隠岐守の所蔵から松浦侯の有に帰したとあるが、原本不明

9 コロートヒストリ（春波楼筆記）天地開闢の事を志した書とし海老沢有道氏は GROOT Historie とすべきであろうが該当書は見当たらないと記している（南蛮学統の研究三八七頁）有坂隆道「豪商升屋平右衛門<sup>山片重芳</sup>の蔵書・収集品について上」（史泉第三十三号）に引用の「書物目録」にある「アルゲメーネヒストリー」拾九巻但

剖判総史 天地剖判セル開闢ノ初ヨリ今時ニ至ルマテノ教千載ノ史録也 とある書物と表題は違うが同一のものではないだろうか。

10 ヒストリイ（写本おらんだ俗話）歴史書で「イスパニヤ」国より和蘭へ使者の来りこの図と記あり」となっている。原書不明。前出山片重芳の「書物目録」にある挿図の多い「子ーテルラントヒストリヘニンケン」大本四巻とあるものと同じかと思われる。

11 マルチネット麻爾知業社 雪花図の原図掲載本として引用 J. F. Martinet : Katholischismus der natuur 四冊本の早い版のことか、現在静岡県立中央図書館葵文庫には第五版一七七九—一七八六がある。国会図書館蔵本は第六版一八二七—一八二九年、佐賀鍋島家蘭書目録には一八五〇—一五三年のものが記載されている。

12 ウーヘンスコール胡賢和哥爾<sup>屋耳列礼</sup>屋耳列礼図解の説明に引用前出「書物目録」にある「アルゲメーネ ウーヘンスコーレ」八巻 ウエーテンシカツペン著述 但三才諸術芸及本然窮理学校諸業細密図説と同じと思われるが、原本は不明。

13 「ジョウガラヒイ」（地球全図略説）朽木昌綱「泰西輿地図説」一七八二や柱川甫周「新製地球万国図説」一七八六などに使われた原本と思われる。Johann Hubner :

Kort begrip der oude en nieuwen geographie, Amsterdam 1722

14 「シヨメール」(写本おらんだ俗話) Chomel 本文に詳述

15 「コンストカヒネット」(同前) Konstkabinet 註四二参照

(三九) 制作のことは江漢の江馬春齡宛の年記のない書簡にみられる。西村 前掲書参照  
註(三七)と同じ

(四〇) 原本は神戸市立南蛮美術館蔵(日付と東都芝門江漢司馬駿著スが最終頁に見られる)和蘭国談目次二頁本文四一頁、おらんだ俗話は五三頁。一頁にはほぼ二百字ほど書かれている。

(四一) 「退閑雜記」は寛政五年老中の職を退き閑にあって筆を取ったもの。寛政六年から九年二月までの分は前編十三巻、その後寛政十年九月までの分は後編四巻、筆写で伝わり明治二五年刊本となった。

(四二) シヨメール Schilderkunst の項に当時の画法書の有名なものを挙げた項があり、その中に同名の表題をもつものがある。(第六巻一七七五年三二七〇頁) TH. LE COMTE: Konstkabinet der Bouw, Schilder, Beeldhouw- en Graveerkunde, 2 deelen というオランダ語版一七四五年がそれである。

(四三) F. W. H. HOLSTEIN Dutch and Flemish Etchings, Engraving, and Woodcuts. Vol.

(四四) コンストシキルドブックを賜られたと江漢の称する時機についての不審は早くは黒田源次「江漢西游日記について」三四一五頁、最近では成瀬不二雄、武埴林太郎「小野田直武と司馬江漢の関係について」美術史第七十冊 三四頁などに見られる。

(四五) 三通りの見方のうち「ボイス」の技術工芸辞典とするのは自然であると思う。「シヨメール」とする見方のうち江漢の明記した「ボイス」との関連の指摘や、それを別にしても単に「シヨメール」とした理由の提示がないままにそのように見る意見も見受けられるが、納得がいかない。また「シヨメール」とする理由を「ボイス」が「シヨメール」の本の表題の「ボイスホーデレエク・ウオルデンブック」の始めの一語の、しかもその訛音であるという見方を西村「日本銅版画志」や小野忠重「江戸の洋画家」では取っているが、江漢自身「ボイス」「シヨメール」と使い分けている以上その見方は江漢に関して成立たないことは明かである。「ボイス」「シヨメール」の両説をとる見方は早くは黒田源次「司馬不言」、西村「日本初期洋画の研究」(西村氏は日本「銅版画誌」

の時は前出のように述べているが後に両方を取っている)池長孟「南蛮美術総目録」などがある。

(四六) 題名は新撰技芸及科学綜合事典、技術學術事典、ボイス術芸全書、ボイス韻府などがある。「典籍泰鏡」(江戸期の本屋の手控へ)には蒲乙斯と欄外にあり、銅板画入、小本、天文測量諸芸術書とあり、此書ハ紅毛国、三才図会共可謂書籍なり、惣ての事お何となく書し候本なり、と説明している。

(四七) 図版模写の現存の一例 拙稿「勃乙期」「縮墨爾」の挿画(学燈 第六十五卷第十二号参照)

(四八) 板沢武雄「日蘭文化交渉史の研究」一一八—一二二頁。四〇—一四〇二頁参照

(四九) 東洋文庫蔵「厚生新編硝子部」上巻勃乙斯術芸全書

『デュルクベルス』Druk Pers と題し阿蘭陀通詞中山作三郎、本木莊左衛門、馬場為八郎の三人が抄訳解説、図版は原図の操作している二人の人物を除いて印刷機だけを全辞典より模写転載してある。

(五〇) 板沢 前掲書 厚生新編訳述の底本二七一頁

(五一) 一七四三年版の翻訳者の Jan LODIEWYK SCHUER は辞典の出版業者、もう一人の A. H. WESRHOF は獣医学士で GOUDA の中学校長で愛書家とある。七冊本には翻訳という文字はなく、改訂倍増補第二版とじてある。その撰者として Jacques Alexander Chalmot 他、数人と記し一七七八年題名を変えて出した版と続編の九冊本はただ単に J. A. CHALMOT 等としてある。Chalmot は軍人から出版業に転じた人であった。

(五二) Chalmot 版に追加された A から V までの図版は第二巻に A 一枚、第三巻に C 一枚、第四巻なし、第五巻 D、F、G、B、No. 2 の五枚、第六巻 H、I、K、L、M、N、O、P、Q の九枚、第七巻 R、S、T、V の四枚、計二十枚である。

(五三) A. M. HIND: A History of Engraving & Etching, 1923, 287—288 頁

(五四) 註(三八)に前出の山片重芳の書物目録に出ている。なお向井晃「シヨメールの伝来とその影響」蘭学資料研究会 研究報告一六〇参照

(五五) 板沢 前掲書 註(四八)と同所

(五六) 〃 二六八—九頁参照